

高崎遺跡 ほか

高崎遺跡第49・51次調査

高崎遺跡第50次調査

東田中窪前遺跡第4次調査

高崎遺跡 ほか

高崎遺跡第49・51次調査

高崎遺跡第50次調査

東田中窪前遺跡第4次調査

平成18年3月

多賀城市教育委員会

序 文

特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの文化財は、本市の歴史が長い年月をかけて連綿と引き継がれてきた歴史のまちであることを物語っております。これら貴重な「文化遺産」は祖先からの預かりものであり、私たちの責務として後世に守り伝えていかなければならないと考えております。このため、教育委員会としては、開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である文化財を適正に保護し、その活用に努めているところです。

さて、本書は平成17年度に開発事業に対応して実施した高崎遺跡と東田中窪前遺跡の発掘調査成果を収録しています。本書に収録した高崎遺跡は、陸奥国府多賀城の付属寺院である多賀城廃寺跡を取り巻くように位置している遺跡で、これまでの調査で廃寺と関連のある遺構・遺物がたびたび発見されるなど非常に重要な遺跡であります。また、この南側に隣接する東田中窪前遺跡はこれまで数回の調査が行われていますが、その実態は未だ不明な点が多い遺跡であります。今回、高崎遺跡では土器埋設遺構などを、東田中窪前遺跡では掘立柱建物跡などを発見し、「古代都市多賀城」を考える上で貴重な成果を提供するものとなりました。これら発掘調査は開発計画の内容によって調査の規模やその成果も様々ですが、このようなひとつひとつの積み重ねが郷土の豊かな歴史を理解し、復原する上では欠くことのできないものと考えております。

この報告書が、市民の皆様をはじめとして広く活用され、埋蔵文化財に対する关心とご理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、ご理解とご協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成18年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

例　　言

- 本書は、平成17年度に実施した3件の調査成果をまとめたものである。
- 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの連続番号である。
- 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。
- 挿図中の高さは標高値を示している。
- 土色は『新版標準土色帖』(小山・竹原:1996)を参考にした。
- 本書の執筆は、調査員全員の協議のもとに、Iを廣瀬真理子、IIを石川俊英、IIIを村松稔、IVを武田健市が担当し、編集は村松が行った。遺構・遺物の図版作成では廣瀬真理子・大友貴晴、遺物の写真撮影は村松稔・廣瀬真理子が担当した。
- 本書の作成に関しては次の方々からご指導・ご協力を賜った。
島原弘征(平泉町文化財センター) 新海和広(秋田県埋蔵文化財センター)
木本元治(福島県立博物館) 藤沢敦 萩田恵子(東北大学埋蔵文化財研究センター)
山口博之 高桑登(山形県埋蔵文化財センター)
- 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I. 遺跡の地理的・歴史的環境	1
II. 高崎遺跡第49・51次調査	4
III. 高崎遺跡第50次調査	8
IV. 東田中窪前遺跡第4次調査	26

調　　査　要　項

- 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
- 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 佐藤慶輝
- 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 主任主査 千葉孝弥
研究員 石川俊英 武田健市
技師 村松 稔
発掘調査員 廣瀬真理子 岩永知子
大友貴晴
- 調査協力者 宗教法人化度寺 代表役員 根來宣昭 曾我新一郎 相澤隆郎 日本住宅株式会社
有限会社 相澤工務店
- 調査従事者 赤間かつ子 浅野喜久男 伊丹一欽 大場孝也 岡本典子 小野寺恵子 小幡 武
菊田百合子 小松まり 今野和子 斎藤金茂 塩井一征 清水 亮 鈴木政義
鈴木芳恵 田中裕子 南城美岐子 浜田優美子 藤田恵子 松田正樹 宮川ハルミ
柳 裕順 若生美津枝 渡辺ゆき子
- 整理従事者 遠藤友美 高木一枝 中村千恵子 松崎祥子 村上和恵 横山佳織

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	高崎遺跡第49次調査	高崎二丁目73-1、79-3	5月16日～7月27日	79m ²	千葉
	高崎遺跡第51次調査	高崎二丁目73-1	7月11日～28日	80m ²	石川・大友
2	高崎遺跡第50次調査	高崎2-194-1、195、195-1、196、197の各一部	6月13日～8月1日	670m ²	村松・廣瀬
3	東田中雍前遺跡第4次調査	東田中一丁目242-1	8月22日～24日	100m ²	武田・岩永

凡　　例

1. 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。
 S B : 建物 S A : 柱列 S D : 溝 S K : 土壙 Pit (P) : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構
2. 奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II—』(多賀城市教育委員会 2003) に従った。
3. 瓦の分類は『多賀城跡 政庁跡 図録編』(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、『多賀城跡 政府跡 本文編』(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) に従った。
4. 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期角材列存続期間中に降灰し、承平4年(934)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える見解と(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』 1998)、『扶桑略記』延喜15年(915)7月13日条にみえる「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991)。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I. 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 高崎遺跡

本遺跡は、多賀城市の東半部を占める低丘陵の西端部に立地し、遺跡中央部には多賀城の付属寺院である多賀城廃寺跡が所在している。その範囲は、東西約1.3km、南北約1kmの広さを有する。この低丘陵は松島丘陵から派生したもので、塩釜方面から本市北東部に至り、南側及び西側の沖積地に向かって枝状に延びている。このため大小の谷が入り組み、緩やかな起伏に富んだ地形を呈している。現在では多賀城廃寺跡周辺以外のほとんどは市街化が進み、多くは宅地となっている。

本遺跡は古墳時代から近世にかけての複合遺跡であり、これまでの調査によって多数の遺構・遺物が発見されている。古墳時代の遺構としては多賀城廃寺跡の調査の際に、前期の竪穴住居跡が3軒発見されている。また、第17次調査の表地区においても中期の竪穴住居跡を発見し、そこから石製模造品とともに原石や未製品、剥片などが出土していることから、工房跡と考えられている。

奈良・平安時代の遺構・遺物は各地点から発見されているが、特に注目されるのは弥勒地区の第10次調査や井戸尻地区の第11次調査である。廃寺跡の南西約200mの地点を対象とした第10次調査では、約80軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などを発見している。竪穴住居跡のなかには工房跡と考えられるものや、灰釉陶器把手付瓶や小型の長頸瓶、鉄製匙などが一括出土したものもあり、付近から仏器である灰釉陶器の淨瓶なども出土している。これらのことから一般集落とは異なる性格をであったと考えられる。また、井戸尻地区における第11次調査では、多量の灯明皿が出土しており、万灯会などの仏教儀式に用いられたものと推測されている。

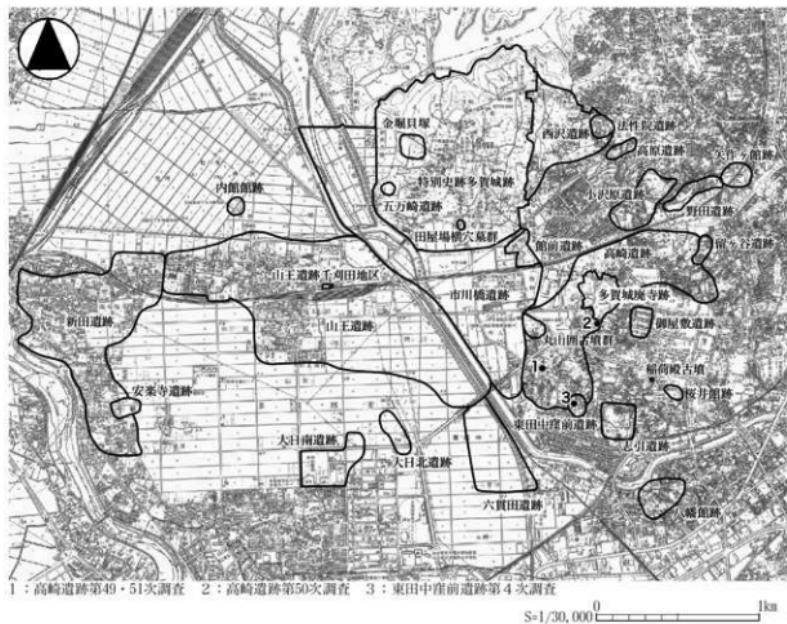
中世になると武士の屋敷に伴うと考えられる遺構を発見している。表地区の第17次調査では、南北約35m、東西40m以上の溝によって区画された武士階級の屋敷跡を発見しており、高崎氏との関連が指摘されている。また第11次調査では15世紀頃から機能し16世紀末頃に埋め戻された大溝を発見している。これの廃絶に関しては天正18年（1590）頃、高崎氏の宗家である八幡氏が、国人領主である留守氏が居城としていた利府城から黒川郡大谷城への移転に伴ってこの地を離れたことと関係していると推測される。さらに、井戸尻地区には「館屋敷」とよばれる一画があり、発掘調査は行われていないが地表観察の結果、東西約70m・南北約60mの平場や土壙、空堀が確認できる。また、文献資料にこの頃の様子をみることができる。『留守家文書』の「斯波直持施行状」によると延文元年（1356）には宮城郡高崎村は八幡氏の所領であったことが確認でき、また『平姓八幡氏系譜』には、八幡氏一族の彦三郎盛忠が寛正6年（1465）四月にこの地に居住し、以来「高崎」の姓を名乗ったという記述がある。天正6年（1578）には高崎近江盛長が八幡氏の家督相続に功績をあげていることが記されている。なお盛長の法号は「化度寺殿」であり、現在の化度寺との関連がうかがわれる。

近世の遺構としては、弥勒地区の第7次調査において江戸時代の屋敷跡を発見し、多数の掘立柱建物跡や溝跡、土壙、地鎮遺構を発見している。地鎮遺構は掘立柱建物跡の北西隅に位置し、かわらけと古銭を浅い土壙に埋納したものである。かわらけのひとつには輪宝を墨書きしたものがあることなどから、建物をつくる際の地鎮に関わるものと考えられている。

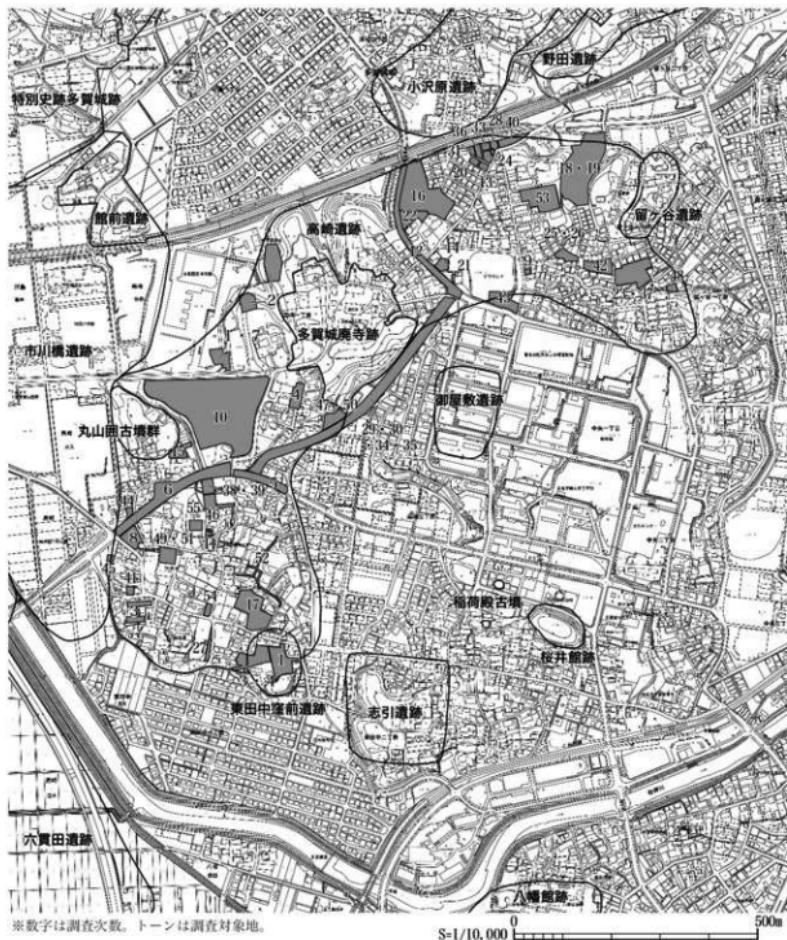
2. 東田中窪前遺跡

本遺跡は、松島・塙釜方面から延びる標高40~70mの低丘陵南西端部に位置している。南側300m付近を砂押川が東流しており、その西側には仙台平野が開けている。遺跡周辺は丘陵部と沖積地が入り組んだ谷状の地形となっており、綏やかではあるが起伏に富んだ様相を見せている。

遺跡内ではこれまで2カ所で発掘調査を実施している。遺跡中央付近で実施した第1次調査では布堀りによる柱列跡や溝跡、北端部で実施した第2次調査では竪穴住居跡3軒をはじめ溝跡や土壙が発見されている。一方、1979年に実施された遺跡分布調査において、遺跡中央付近に幅10m、深さ4mの空堀があり、それを挟んで南北に平坦面が形成されていたと報告されている。これらは現況では確認することができないものの、本遺跡の北東200m付近は通称「館屋敷」と呼ばれ中世「高崎氏」の館跡と考えられていることから、これらに関係する館跡が存在した可能性も考えられよう。



第1図 調査地の位置



第2図 高崎遺跡・東田中塚前遺跡調査区位置図

II. 高崎遺跡第49・51次調査

1. 調査に至る経緯と経過

高崎遺跡第49・51次調査は本堂新築工事とそれに伴う擁壁新設工事に係る発掘調査である。平成16年11月、化度寺本堂新築工事計画に伴う擁壁新設工事と埋蔵文化財の係わりについて、宗教法人化度寺より協議書が提出された。計画の内容は、幼稚園の園舎が立っていた敷地の北端に、在来工法の基礎による本堂を新築するものであった。園舎は、鉄筋による2階層の基礎の上に立っており、1階部分は駐車場として使用していた。そのため本堂建築予定地には大きな段差が生じており、その低い部分に厚さ約2.4~4.1mの盛土を施す計画であったことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。さらに、駐車場の部分については鉄筋の基礎が埋め込まれており、これを設置するために丘陵北斜面を切り落として擁壁をつくるなど地形がかなり改変されていることが窺われた。このことから、遺構の遺存状況はきわめて悪いと予想されたため、その確認を目的として、地権者の協力のもとに400m²を対象と

して試掘調査を実施した（第49次調査）。5月16日から8ヶ所のトレンチを設定し、重機によって盛土の除去を行った。遺構検出作業の結果、調査区西側では岩盤より下層である軟質の砂層が現れるほど削平された状況であることが判明し、そこでは遺構は発見できなかった。東側では標高の高い地点に設定した7・8トレンチから柱穴を発見した。これらの写真撮影と実測図の作成を行い、19日に現地調査を終了した。この結果を受けて遺構を発見した約110m²が本発掘調査の対象となり、それ以外西側については調査の対象から除外しても支障がないと判断した。このことを踏まえて、地権者および施工業者と協議を行ったところ、工事計画の内容を変更することは不可能との結論に達したことから、6月24日に地権者より依頼書の提出を受け、本発掘調査の実施に至ったものである。7月11日から重機によって盛土の除去を行った後、13日より作業員を動員して、遺構検出作業に着手した。その結果、試掘調査で発見した柱穴の他に新たに溝跡を発見した。同日、平面図作成のための基準点を設定し、遺構検出状況の写真撮影後、精査を終えたものから順次実測図を作成に取りかかった。25日全景写真撮影を行い、28日には平面図修正などの補足調査を行って現地調査を終了した。本発掘調査期間中に、本堂新築予定地内について、基礎工事に先だって遺構検出面までの深さを知りたいという地権者からの要請があったため、22日から試掘調査を行い、3ヶ所のトレンチを設定した（第49次調査）。東側と中央部に設定した10・11トレンチでは遺構は検出できなかったが、西側の9トレンチでは、現地表下約1.1mの深さで古代の土器片を含む堆積層を検出し、その上面で柱穴を1基発見した。これを受け再度地権者及び施工業者と協議を行ったところ、本堂



第1図 調査区位置図

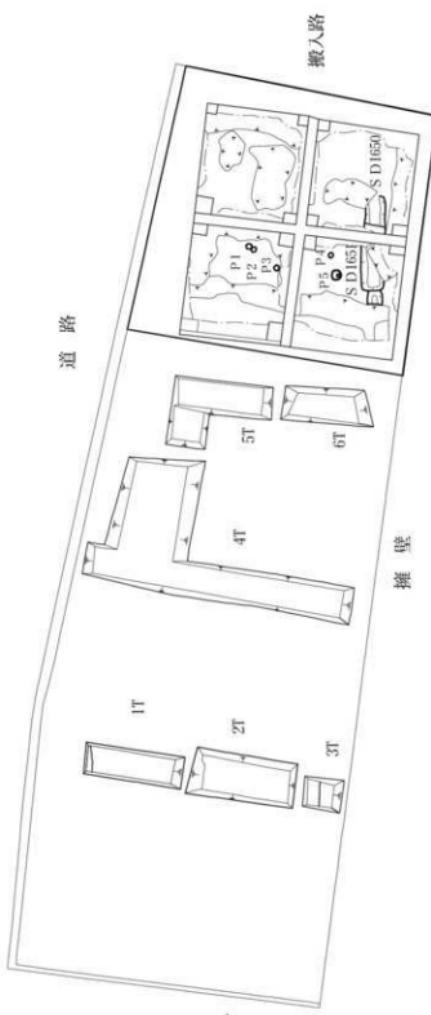
10m
S=1/200

第2図 第49・51次調査区平面図

50

本発掘調査対象範囲

Y = 14,320.000
X = -189,545.000



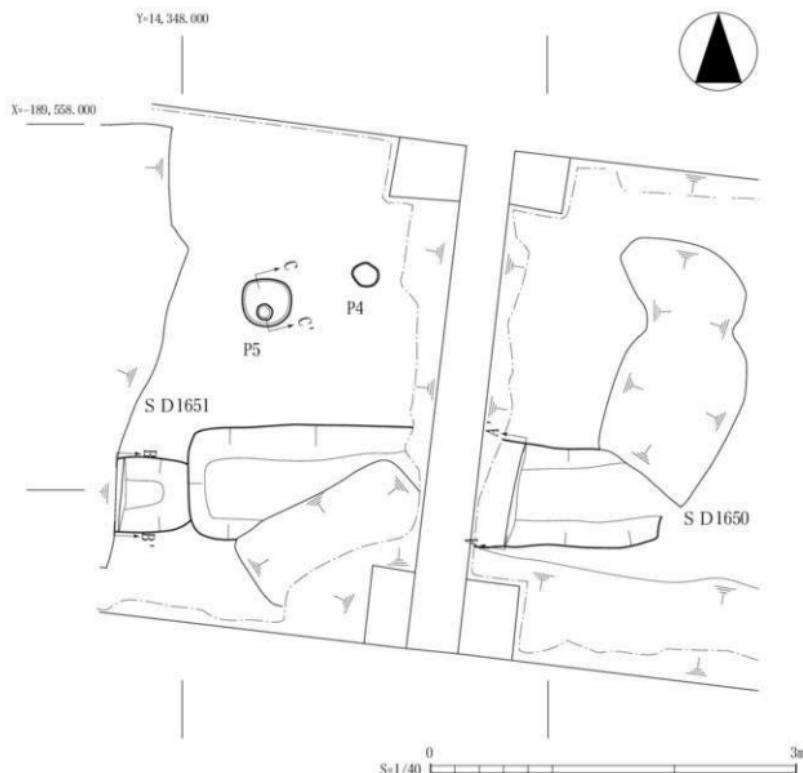
9T



10T



11T



第3図 SD1650・1651溝跡・柱穴平面図

の基礎は遺構に影響を及ぼさない深さにとどめるとの協力が得られたので本発掘調査は行わず、写真撮影と実測図作成を行った後器材を撤収し27日に調査を終了した。

2. 調査成果

(1) 発見遺構と遺物

今回の調査によって発見された遺構は、溝2条と柱穴5基である。これらの遺構はすべて地山上で検出している。

S D1650溝跡（第2・3・4図）

調査区南半部で発見した東西溝跡である。溝の東側の一部は攪乱のため失われており、検出した長さは3.9mである。SD1651と重複し、これより新しい。方向は東西発掘基準線とほぼ一致している。規模は上幅79~90cm、深さは22cmであり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦であるが、西と東では13cmの比高があり西から東に向かって傾斜している。埋土は3層に分けられ、上層（1~2層）は酸化鉄・

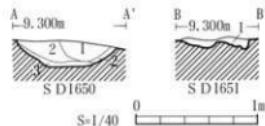
地山粒子と砂を含んだ暗オリーブ褐色粘質土、下層（3層）は地山粒子をわずかに含んだ黒褐色質土である。遺物は土師器杯（B II類）・甕（B類）、須恵器杯・甕・蓋、須恵系土器杯・高台付杯、平瓦（IA類）が出土している。

S D1651溝跡（第2・3・4図）

調査区南西部で発見した東西溝跡である。S D1650と重複し、これより古い。溝の西側は削平のため失われている。検出した長さは60cmで、規模は上幅62cm、深さは6cmである。壁は北側では緩やかに立ち上がり、南側は急に立ち上がっている。底面には起伏がある。埋土は暗オリーブ褐色粘質土の単層である。遺物は古代の平瓦が一点出土している。

その他の遺構（第2・3・5図）

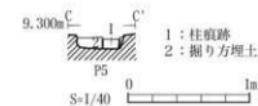
5基の柱穴を発見した。掘立柱建物跡や柱列として組み合うものは確認できなかった。掘り方の平面形はおおよそ円形であり、規模は最も大きいP 5は直径40cm、深さ11cmである。埋土は暗褐色土をブロック状に含んだ黄褐色砂質土である。柱痕跡は直径12~14cmの円形であり、埋土は黄褐色砂質土を粒子状に含んだ暗褐色土である。P 1~4の規模は直径20~24cm、深さは10~20cmである。埋土は炭化物、灰黄色砂質土、黒褐色土を含んだ灰黄色土・黒褐色土・暗褐色砂質土である。遺物はP 5の柱痕跡から土師器杯（B類）の小片が一点出土している。



第4図 S D1650・1651断面図

3.まとめ

今回の調査で発見した遺構は、2条の溝跡と5基の柱穴である。S D1650からは須恵系土器杯・高台付杯が出土していることから10世紀前葉以降と考えられる。S D1651はS D1650と重複しておりこれより古いことから、10世紀前葉以前と考えられる。これらは、いずれも遺物が少なく、これ以上年代を特定できる資料が得られなかつたが、およそ古代の範疇におさまるものと考えられる。柱穴については出土遺物が極めて少なく、年代を考える手がかりが得られなかつた。しかしながら、これらは古代のものと比較して規模や形状、埋土が周辺地区で確認されている中世以降のものと類似していることから、およそ中世以降と考えておきたい。



第5図 柱穴断面図

III. 高崎遺跡第50次調査

1. 調査に至る経緯と経過

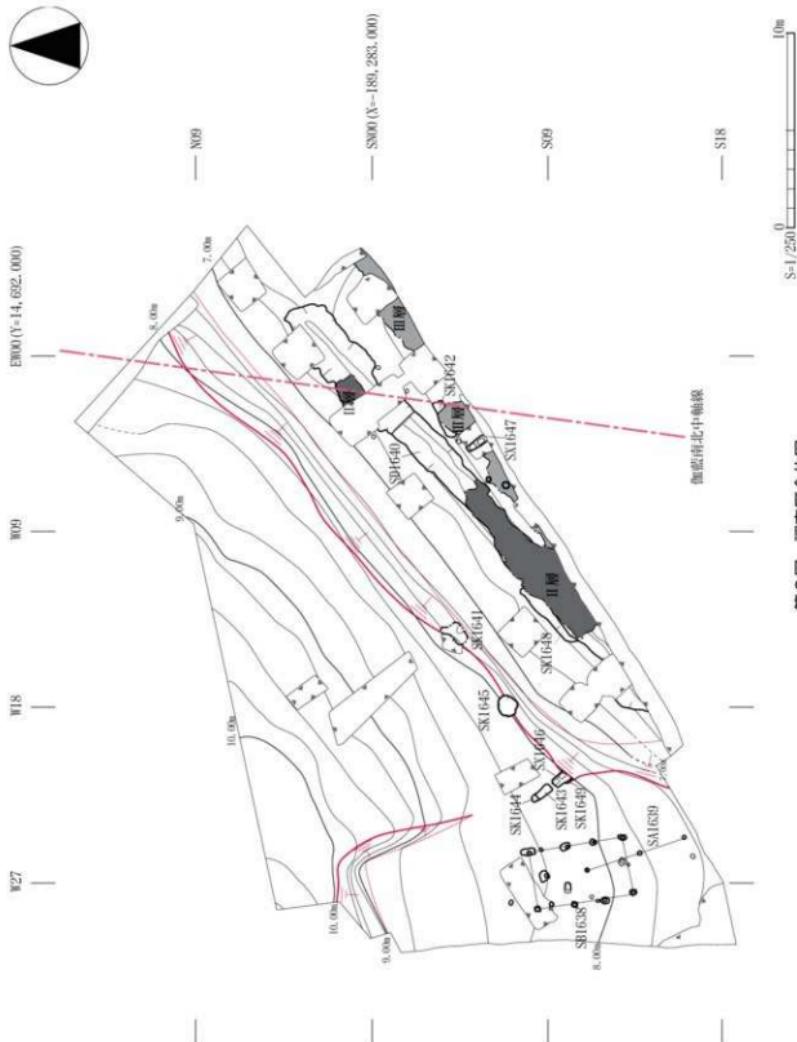
本調査は、アパート建設工事に伴うものである。平成17年2月9日に地権者より当該地における共同住宅2棟新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画内容は、現在果樹園として利用している場所に共同住宅を建設し、その際の基礎工事に最大約5.6mの切土を行うものであった。当該地は、特別史跡多賀城跡附寺跡（多賀城廃寺跡）の南側に隣接し、しかも廃寺の伽藍南北中軸線上にあることから（第1図）、廃寺中門に至る道路及び廃寺関連遺構の確認を目的として、平成17年3月25日から第47次調査を行った。その結果、溝跡や土壙などを確認したが、直接廃寺と関わりがある遺構は発見できなかった。

これを踏まえて、地権者及び施工業者と協議を行った結果、当初の計画とそれに伴う工法の変更是不可能という結論に達し、本発掘調査を行うこととなった。平成17年6月1日、地権者より発掘調査の依頼書および承諾書の提出を受け、13日から15日まで重機による表土（1層）除去を行った。20日から調査区の環境整備と並行して遺構検出を行ったところ、南東側の低い部分を中心に方形の攢乱を多数発見した。地権者の話によれば、過去に果樹の生育を助けるために穴を掘って植えたことがあるということであり、この攢乱はそれに該当すると考えられた。21～23日にSK1641とSD1640を発見し、SD1640はII層に覆われることを確認した。以後、随時写真撮影や図面作成を行った。7月1日に基準点の設定を行い、X=-189,283.000、Y=14,692.000を東西・南北の原点と定め、ここから1m離れるごとに、東西方向は東にE1・E2・・、西にW1・W2・・、南北方向は北にN1・N2・・、南にS1・S2・・と表示することとした。7日に、西側の平坦面でSB1638、SA1639を、8日にSK1642～1645・1649、SX1646を、13日にSX1647を発見した。これらは調査を進めていくにしたがい、SX1646・1647が土器埋設遺構であることが判明し、II層とSK1645から近世の遺物が出土したことから、これらの年代に関する手がかりが得られた。29日に調査区の地形測量を行い、8月1日には器材を撤収し、現地発掘調査を完了した。



第1図 調査区位置図

第2図 調査区全体図



2. 調査成果

(1) 層序

本調査区は全体的に削平を受けており、多くの部分では表土（I層）を除去すると直ちに地山が現れたが、調査区南東部において2つの堆積層を確認した。以下、各層ごとに説明する。

I層：表土。厚さは約30cm。

II層：調査区南東側において確認した褐色粘質土層である。厚さは10～14cmで炭化物と岩盤粒を含む。S D1640を覆っており、19世紀頃の遺物が出土している。

III層：黒褐色シルト層で、調査区東側でのみ確認した。厚さは6～17cmで岩盤粒を少量含む。土師器や須恵器が出土しており、古代の旧表土と考えられる。SK1642を覆っている。

IV層：黄色の岩盤で、一部に粘質土のものもある。基盤層であり、この上面で遺構検出面となる。

(2) 発見した遺構・遺物

今回の調査では、掘立柱建物跡、柱列跡、土器埋設遺構、溝跡、土壙を発見した。これらは全てIV層上面で検出した。

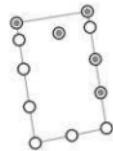
S B1638掘立柱建物跡（第3図）

調査区西側の平坦部において発見した桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。S A1639と重複しているが、柱穴に直接切り合がないため、新旧関係は不明である。柱は全て抜き取られており、Pit 1・6・7・9・10には柱のあたり痕跡を残す抜取り穴を確認した（註）。方向は東側柱列でみると北で約11度西に偏している。桁行については、東側柱列で総長約4.8m、柱間は北より約2m、1.19m、約1.6mである。梁行については、北妻で2.92mで、南妻では約2.9m、柱間は東から約1.4m、約1.5mである。掘り方は方形と円形があり、方形のものは一辺0.68～1.4m、深さ39～52cm、円形のものは直径0.19～1.04mで、深さは9～47cmである。掘り方埋土は岩盤をブロック状に多く含む明黄褐色シルトである。柱抜取り穴は岩盤をブロック状に少量含むオリーブ褐色シルトである。なお、両側柱とも北妻と1間目の柱穴との間に小柱穴を発見した。いずれも柱痕跡は確認していないが、おおよそ側柱の柱筋上に位置していることから間柱と考えられる。

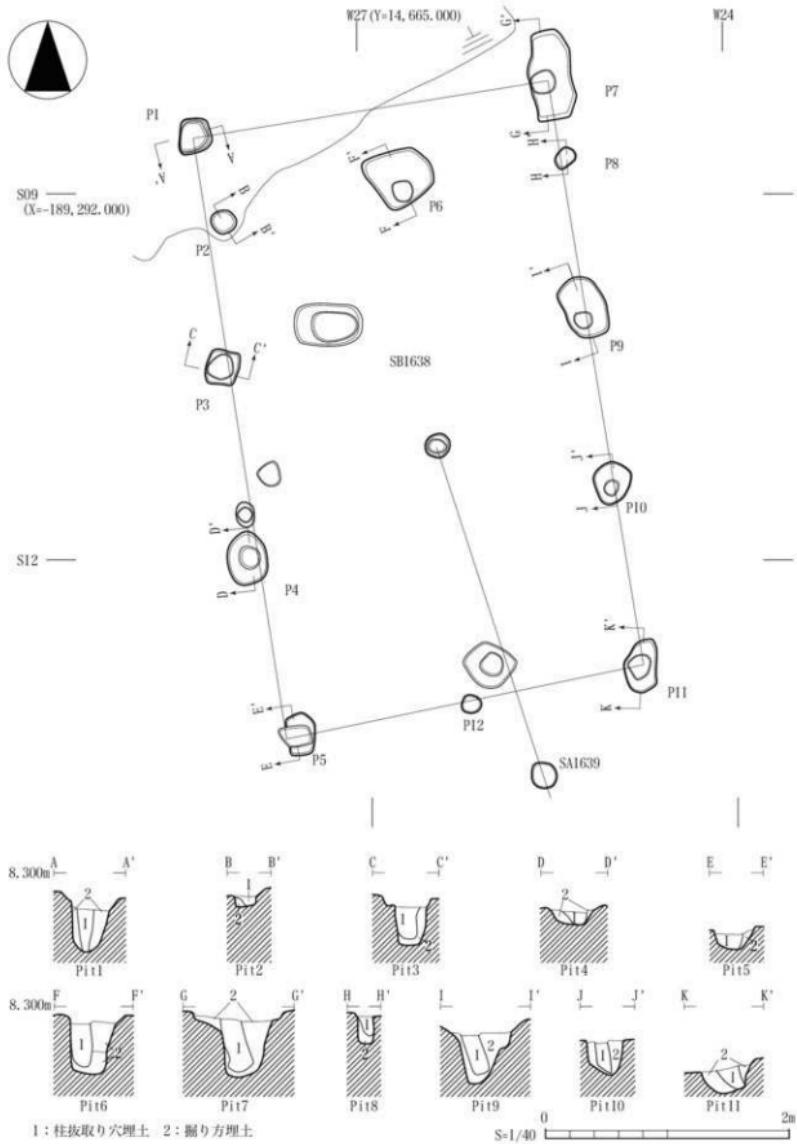
遺物は掘り方から土師器甕（B類）が出土している。

S A1639柱列跡（第11・12図）

調査区西側の平坦部において発見した南北2間の柱列跡である。S B1638と重複しているが、柱穴に直接の切り合がないため、新旧関係は不明である。柱は全て抜き取られており、最も北側の柱穴にはあたり痕跡を残す抜取り穴を確認した（註）。方向は北で約18度西に偏している。総長約5.3m、柱間は北から約2.9m、約2.4mである。掘り方は円形で、規模は直径21cm、深さ15～30cmである。掘り方埋土は岩盤をブロック状に多く含む淡黄色シルトで、柱抜取り穴は岩盤をブロック状に少量



（註）柱のあたり痕跡を残す抜取り穴としたものは、その形状をみると平面が円形で、断面もほぼ直立するなど柱痕跡と類似した特徴をもっている。しかしその埋土にIV層の岩盤をブロック状に含むことから、柱痕跡とは明確に区別するべきものであると考えられる。ただし、その位置については本来の柱位置を反映していると考えられることから、柱痕跡と同様の精度で計測している。なお、模式図中はこれを◎として表示している。



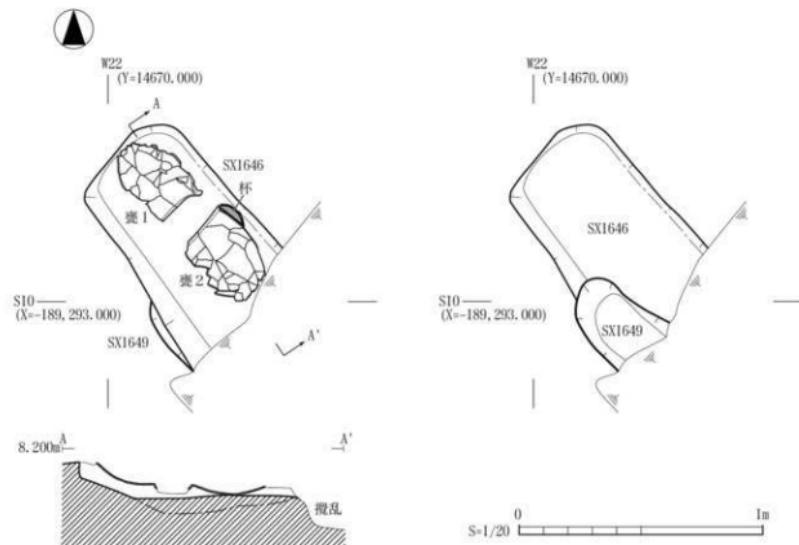
第3図 SB1638平面図・断面図

含む黄灰色シルトである。

遺物は出土していない。

S X1646土器埋設遺構（第4図）

調査区西側の平坦面で発見した土器埋設遺構である。2個体の土師器甕（B類）の口縁部を向かい合わせにして横位で埋設したものである（第6図1・2）。著しく削平されており、いずれの甕も上になっている部分は失われている。S K1649と重複しており、これより新しい。主軸方向は北で約42度西に偏している。甕1は口径が22.6cm、甕2は口径が23.2cmで、残存部でみると法量は近似しており、胎土も似ている。甕2は掘り方底面に接し、甕1はやや浮いた状態で埋設されている。両者には13cmの間隔がある。また、甕2口縁部の横には土師器杯（B I類）が口縁を甕側に向けた状態で出土している（第6図3）。甕および杯の中では内容物などは確認できなかった。掘り方の平面形は長方形で、規模は長辺86cm以上、短辺58cm、深さ6cmである。底面はほぼ平坦であるが、北東側がやや浅くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色シルトである。

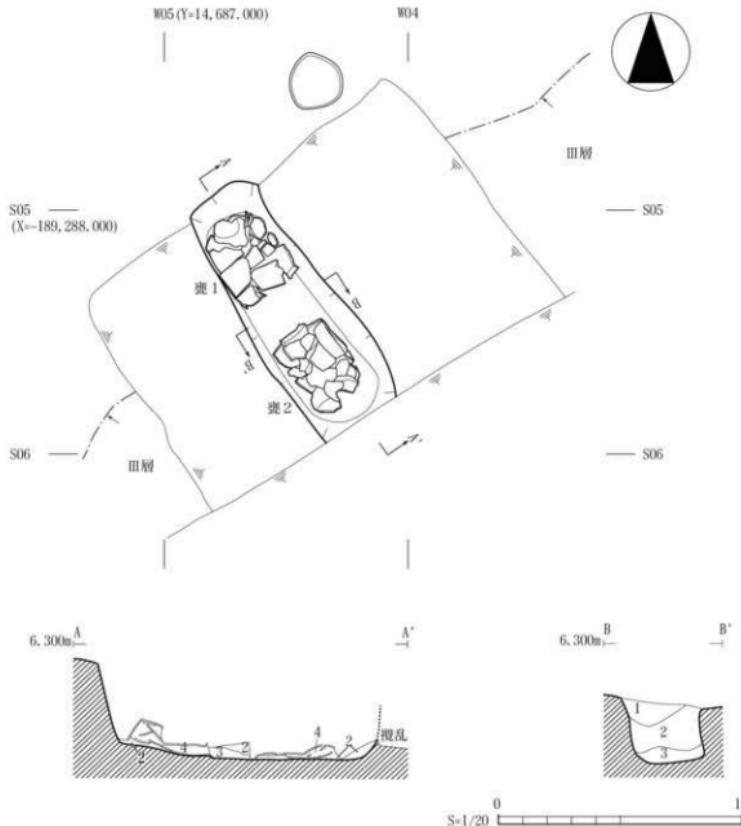


第4図 S X1646 · S K1649平面図・断面図

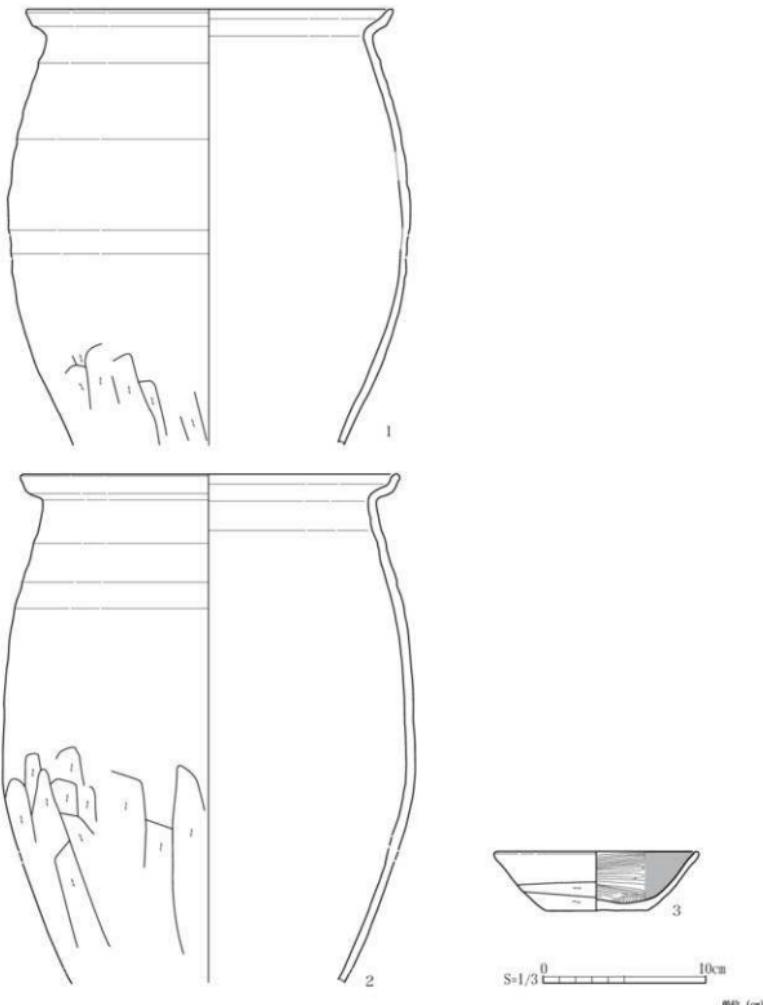
S X1647土器埋設遺構（第5図）

調査区南東側で発見した土器埋設遺構である。南側の一部が攪乱により失われている。2個体の土師器甕（B類）の口縁部を向かい合わせにして横位に埋設している（第7図1・2）。その主軸方向は北で約36度西に偏している。甕2の口縁については全て失われているものの、これらの胎土や法量は近似してい

る。甕は掘り方底面に接し、両者の間には18cmの間隔がある。またいずれも体部外面の下半部にススが付着していることから、煮沸具として使用されたことが推測される。掘り方の平面形は長方形で、規模は長辺1.1m以上、短辺42cm、深さ33cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は4層に区分でき、1層はオリーブ褐色シルト、2層は、IV層の岩盤をブロック状に多く含むにぶい黄色シルト、3層はIV層の岩盤をブロック状に少量含む黄褐色シルトである。4層は黄褐色シルトで特に内容物などは確認できなかった。その他、1層から土師器甕（B類）の破片が出土している。

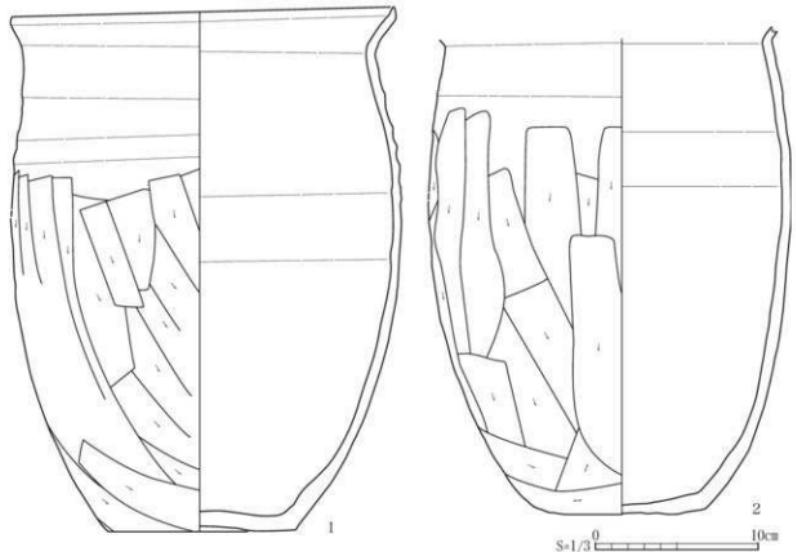


第5図 SX1647 土器埋設遺構平面図・断面図



番号	種類	遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・甌	SX1646	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、底部：不明	ロクロナデ	(22.6) 8/24	—	—	5-3	R 4	北西側（甌1）
2	土師器・甌	SX1646	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、底部：不明	ロクロナデ	(23.2) 5/24	—	—	5-3	R 3	南東側（甌2）
3	土師器・杯	SX1646	ロクロナデ、体部下半～底部：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色處理	(12.6) 8/24	6.2 19/24	3.6	5-3	R 5	

第6図 SX1646出土遺物



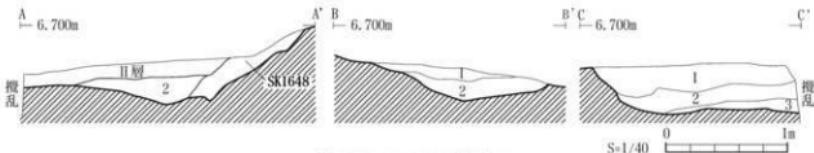
単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 番号	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・壺	S X1647	ロクロナデ→手持ちヘラケズ り、底部：不明	ロクロナデ	23.6 24/24	11.6 24/24	32.3	5-1	R 1	体部下半スヌ付着 北西側（壺1）
2	土師器・壺	S X1647	ロクロナデ→手持ちヘラケズ り、底部：不明	ロクロナデ	—	10.6 24/24	—	5-2	R 2	体部下半スヌ付着 南東側（壺2）

第7図 S X1647出土遺物

SD1640溝跡（第2・8・11・13図）

調査区南東側で発見した北東から南西方向に延びる溝跡である。II層に覆われ、IV層上面で発見した。一方は調査区東壁より約4.5m西側で止まっており、もう一方は調査区南東壁付近で南側へ屈曲し、さらに調査区外へ延びている。SK1648と重複しており、それより新しい。規模は、長さ27.4m以上で、上幅1.2～2.4m、下幅18～80cm、深さ20～44cmである。方向は東で約43度北に偏している。底面にはやや凹凸があり、南西方向に向かって低くなっている。その比高は44cmである。壁は斜めに立ち上がりっている。埋土は2層に区分でき、1層は岩盤の小さいブロックを少量含む褐色シルト、2層は灰白色火山灰と岩盤をブロック状にそれぞれ少量含む褐色シルトであり、下層ほど粘性が強くなる。



第8図 SD1640断面図

遺物は1層から須恵器甕、2層から須恵器杯、軒丸瓦、丸瓦（II類）、平瓦（IA類）、鉄滓が出土している。

S K1641土壤（第10・13図）

調査区中央で発見した土壤である。北側を攪乱によって失われており、東側も大きく削平されているため、平面形は不明である。規模は上幅1.3m、下幅36cm、深さ37cmである。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は3層に区分でき、いずれも岩盤をブロック状に少量含んでいる。1層は明黄褐色粘質土、2層は黄褐色シルト、3層は明黄褐色シルトである。

遺物は1層から土師器甕（B類）が出土している（第9図1）。

S K1642土壤（第10・13図）

調査区南東側で発見した土壤である。Ⅲ層に覆われている。平面形は長方形で、規模は長辺1.96m、短辺58cm、深さは18～29cmである。主軸の方向は東で約26度北に偏している。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は2層に区分でき、1層はにぶい黄褐色シルト、2層は岩盤をブロック状に多く含むにぶい橙色シルトであり、人為的な堆積と考えられる。

遺物は、土師器甕（B類）が出土している。

S K1643土壤（第10・11図）

調査区西側の平坦面で発見した土壤である。S K1644と重複しており、これより新しい。平面形は長方形で、規模は長辺84cm、短辺34cm、深さは18cmである。主軸の方向は北で約38度西に偏している。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に区分でき、1層はオリーブ褐色シルト、2層は黄褐色粘質土である。

遺物は1層から刀子と石鐵が出土している。

S K1644土壤（第10・11図）

調査区西側の平坦面で発見した土壤である。S K1643と重複しておりこれより古い。平面形は梢円形と推定され、規模は長径32cm、短径35cm、深さ8cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は岩盤をブロック状に多く含むにぶい黄色砂質土である。

遺物は出土していない。

S K1645土壤（第10・11図）

調査区西側で発見した土壤である。平面形はおおよそ円形であり、規模は直径約1.1m、深さ56cmである。底面は中央が窪んでおり、壁は一部急に立ち上がる。埋土は2層に区分でき、1層は褐色シルトで、2層は岩盤をブロック状に少量含む褐色シルトである。

遺物は、1層から土師器甕（B類）、須恵器甕、砥石が、2層から肥前産と考えられる磁器椀（第9図2）、錢貨〔洪武通寶〕が出土している。

S K1648土壤（第8・13図）

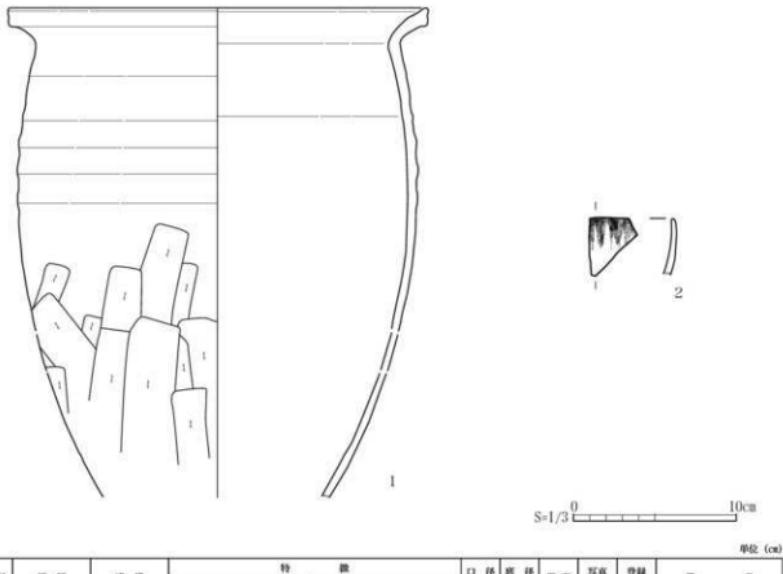
調査区南東側で発見した土壤である。平面形は北東から南西方向に細長い溝状である。S D1640と重複しており、これより古い。規模は、東西3.9m、南北68cm、深さ22cmである。壁は斜めに立ち上がる。埋土はブロック状のIV層を多量に含むにぶい黄褐色シルトである。

遺物は出土していない。

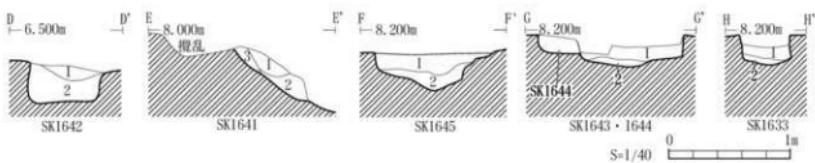
S K1649土壤 (第4・11図)

調査区西側平坦面で発見した土壤である。S X1646と重複しておりこれより古い。平面形は梢円形と推測され、規模は上幅24~34cm、下幅18~24cm、深さ7cmである。長軸の方向は北で約45度西に偏している。埋土は暗オリーブ褐色シルトである。

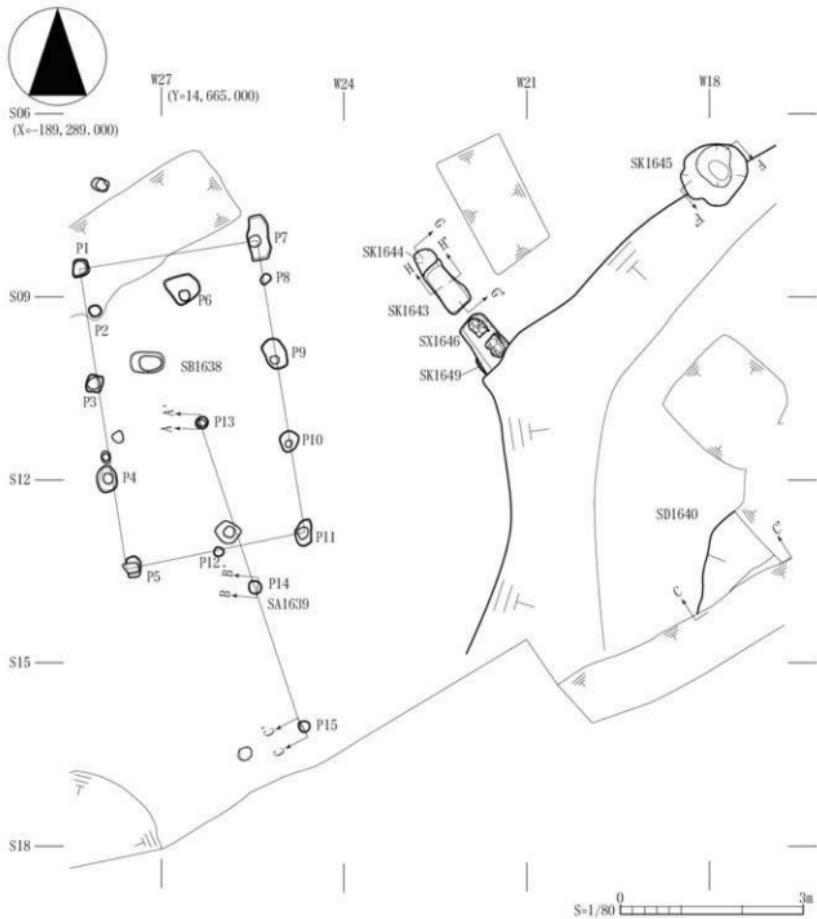
遺物は、土師器甕（B類）が出土している。



第9図 S K1641・1645出土遺物



第10図 S K1641・1642・1643・1645断面図



第11図 遺構平面図(1)

8. 100m

C

B

B'

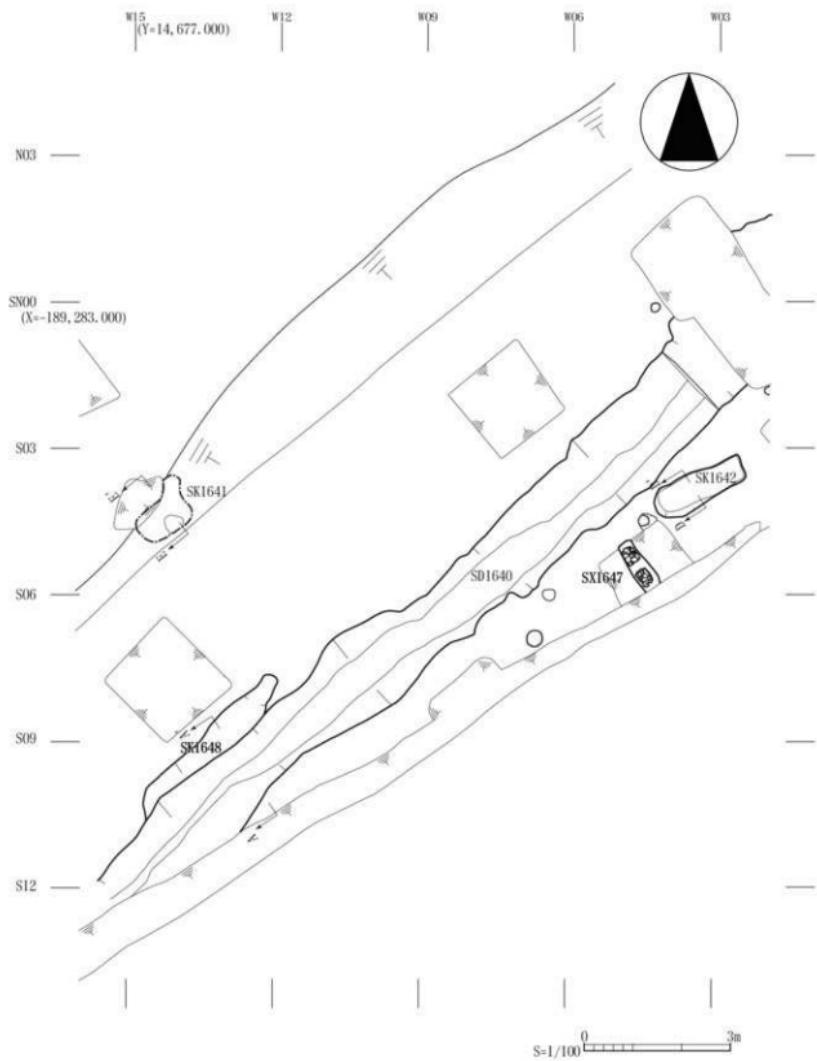
A

A'

S=1/80 0 3m



第12図 SA1639断面図



第13図 遺構平面図（2）

3. 考察

今回の調査では、掘立柱建物跡、柱列跡、土器埋設遺構、溝跡、土壌などを発見した。以下、これらの年代と性格について考える。

(1) 遺構の年代

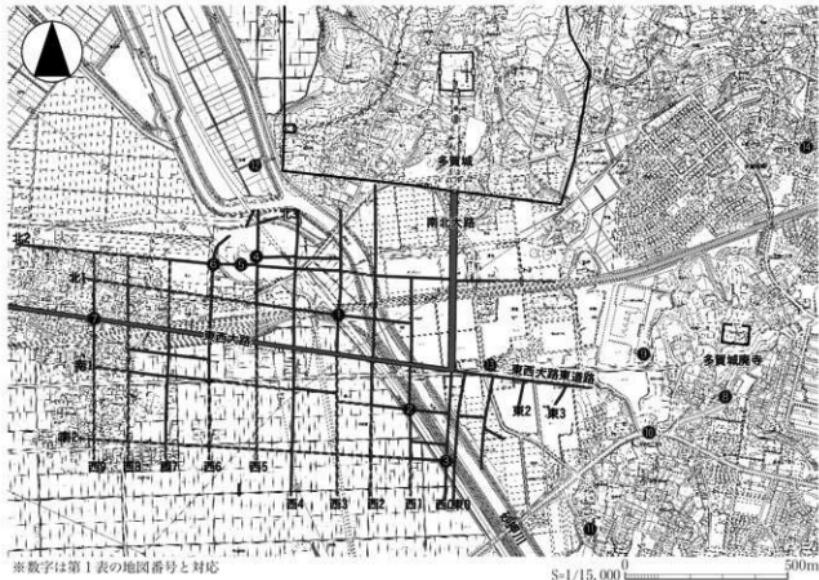
S B1638は掘り方埋土から土師器甕のB類が出土しているが、柱穴の規模は古代のものに比べて小規模であり、形状も不揃いであることが指摘できる。このような特徴は周辺の調査において確認されている中世以降の掘立柱建物跡と類似しており、本建物跡の年代は中世もしくはそれ以降の可能性が考えられる。また、S A1639についても柱穴の特徴はS B1638と類似していることから同様の年代を考えておきたい。

S X1646は、土師器杯のB I類（第6図3）と土師器甕のB類（第6図1・2）を埋設しており、一括性の高い資料である。杯については底口比（底径/口径比）が0.49、口高比（器高/口径比）が0.29という数値が示すように、10世紀のものと比較して器高が低く底部がやや大きい器形を呈している。底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリされており、内面のヘラミガキの方向は、底部は放射状に、口縁部から体部にかけて横方向に施されている。甕はいずれもロクロ調整されており、体部下半は縱方向に手持ちヘラケズリされている。このような器形と製作技法による土師器杯と甕は、多賀城跡S E2101B井戸跡第III層出土土器群、同S K2167土壤出土土器群の中に見いだすことができる（註）。S E2101B第III層は9世紀前葉を上限とし、下限は天長9（832）年以降でもさほど隔たらない9世紀前半に位置づけられている。S K2167はS E2101B第III層と年代的に近いが、それよりもやや新しく、9世紀後半に位置づけられている第61次調査第10層出土土器群より古いとして9世紀中葉頃の年代を与えられている。S X1646は土師器杯1点と甕2点という資料の数において制約があるものの、大きくは9世紀前半～中葉頃という年代幅におさまるものと考えておきたい。また、S X1647は土師器甕のB類を埋設したものである（第7図1・2）。これらは口縁部から体部へ移行する付近の角度が大きいことから、くびれが小さくなっている、ヘラケズリが体部の上半部にまで施され、叩きによる調整は認められない。これらの特徴から具体的な年代を推定するには至らなかったため、現段階ではB類が出現する8世紀後葉以降としておきたい。

S K1641・1642・1649は土師器甕のB類が出土しておりA類は出土していないことから8世紀後葉以降のものであるが、詳細については不明である。S K1645については、底面から肥前産と見られる磁器碗（第9図2）が出土している。口縁部に雨降り文が施されており、肥前陶磁の編年によれば18世紀前半頃から確認されているものである。したがって、S K1645は18世紀前半以降である。

S D1640については埋土に灰白色火山灰をブロック状に含んでいることと、19世紀頃の陶器を含むII層に覆われているという事実があるにすぎず、具体的な年代は明らかではない。そこで改めて調査区の地形についてみると、北東から南西にかけて広がる崖面と、S K1641・1649やS X1646の間には新旧関係が想定され、その状況は古代の遺構であるS K1641・1649やS X1646より後世に形成されたと見ることができる。S D1640はこの崖とほぼ平行するように延びており、調査区北東側で崖の傾斜がやや緩くなっている地点で途切れていることから、崖の形成とS D1640が掘削された年代はおおよそ同じ頃である可能性がある。

（註）宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992』 1993



第14図 多賀城外の方格地割りと土器埋設遺構分布図

(2) 多賀城廃寺との関係について

今回の調査区は多賀城廃寺の伽藍南北中軸線の南側延長線上にあたり、廃寺へ向かう道路跡などの存在が想定された場所である。調査の結果、S D1640を発見したが、方向は東で約43度北に偏しており、伽藍南北中軸線が北で約8度東へ偏していることと比較すると大きく異なっている。また、溝跡は中軸線の東側約5.8mの位置まで伸びており、北に向かって屈曲する様子もうかがえない。さらに、対になる同時期の溝跡も発見できなかったことから道路側溝とは考え難い。前述したとおり、本調査区は古代以降に崖面が形成されるような大きな地形の変更が行われており、古代の遺構の遺存状況に少なからず影響を及ぼしている。そのため、道路跡等の廃寺と直接関連する遺構の存在については明らかにできなかった。

(3) 土器埋設遺構について

今回の調査において土器埋設遺構を2基発見した。いずれも2個体の土師器甕の口縁部を向い合わせにし、横位で埋設したものである。土師器甕が単体で横位に埋設したものや、3個体以上埋設したもの、土師器甕と大型の土師器杯を埋設したものを含めると青森県から長野県、新潟県までの広い範囲に分布することが確認でき、その中でも宮城県の多賀城市と岩手県の北上川流域の遺跡から多く発見されている。特に、多賀城市内では27基が発見されており(註)、その分布が集中していることが注目される(第1

(註) 高崎道路第1次調査において発見したSX1489は土師器甕が人为的に埋設された遺構としている。しかし、遺存状態が悪く、同様の土器埋設遺構と判断するにはいたらなかったことから、ここでは除外することとした。なお、同遺構についてはリン・カルシウム分析を行っており、内部に何らかの生物遺体が存在していることも指摘されているが、後世の耕作に伴う施肥の可能性も否定できないという結果が示されている。

都道府県	No.	地図番号	遺跡	地区	出土遺物	位置	文献	
宮城	1	1	山王遺跡	多賀前	土師器甕1	北1・西3道路交差点	(3)	
	2				土師器甕2	北1・西3道路交差点		
	3				土師器甕1・土師器杯1	北1・西3道路交差点		
	4				土師器甕1	南1・西1道路交差点		
	5				土師器甕1	南1・西1道路交差点		
	6				土師器甕2	南2・西0道路交差点付近		
	7			八幡	土師器甕2	南2・西0道路交差点付近	(5)	
	8				土師器甕1	北2・3間・西5道路交差点		
	9				土師器甕2	北2道路路面上		
	10		東町舗	八幡	土師器甕2	北2・西6道路交差点	(11)	
	11				土師器甕1	東西大路・西9道路交差点	(10)	
	12				土師器甕1	東西大路・西9道路交差点		
	13	高崎遺跡	坂下	中谷地	土師器甕2		本書	
	14				土師器甕2・土師器杯1			
	15		赤勘		土師器甕2			
	16				土師器甕2			
	17		井戸尻		土師器甕1			
	18				土師器甕2			
	19				土師器甕2			
	20		市川橋遺跡	中谷地	土師器甕2		(7)	
	21				土師器甕2			
	22				土師器甕2			
	23				土師器甕2			
	24				土師器甕1			
	25				土師器甕1			
	26				高平	東西大路東道路・東1道路交差点付近		
青森	27	14	小沢原遺跡	中谷地	土師器甕2		(13)	
	28				土師器甕2			
秋田	29	安久東遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(14)	
	30				土師器甕2			
	31	手取遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕4・土師器杯1		(17)	
	32				土師器甕2			
	33	佐内屋敷遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(1)	
	34				土師器甕2			
	35	名生館遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(2)	
	36				土師器甕2			
	37	須江闇ノ入遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(6)	
	38				土師器甕2			
岩手	39	合子沢松森(2)遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(16)	
	40				土師器甕2			
	41	野尻(1)遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(19)	
	42				土師器甕2			
	43	東大畑遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(18)	
	44				土師器甕2			
	45	真城ヶ丘团地遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(22)	
	46				土師器甕3			
	47	中林遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(31)	
	48				土師器甕2			
山形	49	松原前遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(40)	
	50				土師器甕2			
	51	本町II遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(40)	
	52				土師器甕3			
	53	岩崎大地遺跡群	中谷地	中谷地	土師器甕2		(29)	
	54				土師器甕3			
	55	熊堂B遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕1		(28)	
	56				土師器甕2			
	57	山海窯跡群	中谷地	中谷地	土師器甕2		(30)	
	58				土師器甕2			
	59	千河原遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(33)	
	60				土師器甕2			
	61	西谷地遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2・土師器杯1		(32)	
	62				土師器甕2			
	63	高瀬山遺跡群	中谷地	中谷地	土師器甕2		(34)	
	64				土師器甕2			
	65	中袋遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(35)	
	66				土師器甕2			
	67	愛谷遺跡	中谷地	中谷地	土師器甕2		(36)	
	68				土師器甕2			
	69				土師器甕2		(37)	

※地図番号は第14図と、文献は参考文献の数字と対応

第1表 東北地方の土器埋設遺構

表)。以下、市内における出土例を中心にして、今回発見した土器埋設遺構について若干検討してみたい。

はじめに各遺跡における検出例について整理すると、方格地割りが施行された山王遺跡多賀前地区や八幡地区、東町浦地区、伏石地区の調査では正位と横位をあわせて多数の土器埋設遺構が発見されており、道路に埋設されるものと区画内に埋設されるものには相違が認められることを指摘されている(註1)。道路跡から発見された土器埋設遺構については、正位のものと横位のものがあり、交差点かその周辺に限られている。その分布も東西大路では西9道路との交差点では確認されているが、それより東側の国司の館と推定されている場所などでは発見されていないことから、埋設する際にその場所の選定にかかわる何らかの規制があったと考えられている。また、一部は道路の盛土整地時に埋設されたと考えられるものがあり、これらは道路建設に関わる祭祀と考えられている。一方、区画内から発見されたものは、全て正位で発見されており横位のものはないことが特徴としてあげられる。また、方格地割りが確認されていない東側の丘陵部において発見されたものについては、道路の存在は確認できないにもかかわらず、北1道路や南1道路の延長線上に位置するものが2例あり、注目される。

一方、特別史跡多賀城跡の西側に位置する市川橋遺跡中谷地地区では、93基の土葬墓と8基の土器埋設遺構がまとまって発見されている(註2)。この地区は方格地割りの外側にあたり砂押川に面した河原に形成された墓域と考えられている。その被葬者については副葬品が少なく、出土する場合でも日用の什器を中心であることから、城下で生活する庶民の墓地と考えられている。土葬墓群に隣接した土器埋設遺構も墓の一形態と考えられており、その規模から乳幼児用の墓としている。

また、佐内屋敷遺跡、手取遺跡、名生館遺跡、須江関ノ入遺跡、安久東遺跡では、居住域から離れた場所で単独もしくは散在的に発見される例がある。さらに高崎遺跡や小沢原遺跡で方格地割りや道路遺構との関連性が見出しそういき場所での発見例がある。

以上のことまとめると、①道路や交差点の付近で発見され、道路に関わる祭祀など何らかの関連が想定される例、②道路の延長線上で発見され、道路と何らかの関連性がうかがわれる例、③墓域の中で発見され、小児用の墓と考えられる例、④集落のはずれなどで単独もしくは散在的に発見され、他の遺構との関連性が特に見出せない例(註3)、の4つの分類が想定される。

今回発見した土器埋設遺構について考える際に、手がかりとなるのは多賀城廃寺との位置関係である。前述したとおり本調査区の近くには廃寺へ向かう道路跡などの存在が推定された場所であるが、それを確認することは出来なかった。しかしながら、方格地割りが発見されていない地区においても、おおよそ道路跡の延長線上において発見される場合があり、高崎遺跡においては弥勒地区の第7次調査や井戸尻地区の第6次調査で発見した土器埋設遺構がそれに該当する。また井戸尻地区的第11次調査では、万燈会のような仏教儀式に使用されたと考えられる多量の灯明皿が出土した土器捨て場跡が南2道路の延長線上にあり、この付近で儀式を執り行った可能性が指摘されている。この点から考えると、今回の調査では道路跡を発見することは出来なかつたが、その位置はおおよそ廃寺の伽藍南北中軸線上にあることは指摘できよう。

さて、出土状況から①～④の分類を行ったが、これらの性格を決定付けるような直接的な根拠は今のところ見いだせていないのが現状である。民俗の事例を引用すれば、乳幼児用の墓、辻の祭祀、胞衣もしくは臍の縒の埋納などの可能性が考えられ、またリン・カルシウム分析や脂肪酸分析といった自然科学によ

(註1) 宮城県教育委員会『山王遺跡IV－多賀前地区考察編一』宮城県文化財調査報告書第171集 1996

(註2) 宮城県教育委員会『市川橋遺跡』宮城県文化財調査報告書第193集 2003

(註3) この分類の中には、調査区の制約等で周辺の状況が明確ではない例も便宜的に含めておきたい。

る分析においても、人体もしくは何らかの有機物を埋納していた可能性を示唆するものが多い。これらは、性格を考える上での手がかりではあるもののいずれも特定するには至っておらず、今後様々な角度から検討すべき課題と考えられる。

ところで、今回発見した2基の土器埋設遺構の特徴として、いずれも口縁部を密着させずに間隔を生じさせて埋設している点があげられる。これは、これまでの報告例には見られない特徴であり、例外的な埋設方法と考えられるが、このような行為がどのようなことに起因するのか判断できる手がかりは得られなかった。今後、類例の増加を待つて検討することとしたい。

4.まとめ

- (1) 多賀城廃寺の伽藍南北中軸線の南側延長線上を調査し、掘立柱建物跡、柱列跡、土器埋設遺構、溝跡、土壌などを発見した。
- (2) 今回の調査では多賀城廃寺と直接関連する遺構は発見できなかった。今後、廃寺に至る道路跡をはじめ、多賀城と廃寺を結ぶルートを明らかにすることが課題と考えられる。
- (3) 発見した土器埋設遺構は、向かい合わせた口縁部を密着させずに間隔を生じさせていることが特徴として挙げられ、他に類例がないものである。

参考文献

- (1) 宮城県教育委員会『東北自動車道遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第63集 1980
- (2) 宮城県教育委員会『東北自動車道遺跡調査報告書III』宮城県文化財調査報告書第93集 1983
- (3) 宮城県教育委員会『山王遺跡II—多賀前地区遺構編一』宮城県文化財調査報告書第167集 1995
- (4) 宮城県教育委員会『山王遺跡IV—多賀前地区考察編一』宮城県文化財調査報告書第171集 1996
- (5) 宮城県教育委員会『山王遺跡V—第2分冊(伏石地区・考察)一』宮城県文化財調査報告書第174集 1997
- (6) 宮城県教育委員会『名生館遺跡 下草古城本丸跡ほか』宮城県文化財調査報告書第181集 1999
- (7) 宮城県教育委員会『市川橋遺跡』宮城県文化財調査報告書第193集 2003
- (8) 多賀城市教育委員会『高崎遺跡—都市計画街路高崎大代線外1線建設工事関連発掘調査報告書II—』多賀城市文化財調査報告書第12集 1987
- (9) 多賀城市教育委員会『高崎遺跡—中央公園関連調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第19集 1989
- (10) 多賀城市教育委員会『山王遺跡—第8次調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第22集 1990
- (11) 多賀城市教育委員会『山王遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第29集 1992
- (12) 多賀城市教育委員会『高崎遺跡—第11次調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第37集 1995
- (13) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡・高崎遺跡』多賀城市文化財調査報告書第72集 2003
- (14) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報—平成11年度—』 2000
- (15) 多賀城市『多賀城市史 第4巻 考古資料』 1991
- (16) 河南町教育委員会『須江関ノ入遺跡—工業団地造成に伴う発掘調査概報一』河南町文化財調査報告書第4集 1990
- (17) 仙台市教育委員会『安久東遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第10集 1976
- (18) 青森県教育委員会『野尻(1)遺跡III—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う発掘調査報告一』青森県埋蔵文化財調査報告書第227集 2000
- (19) 青森市教育委員会『合子沢松森(2)遺跡発掘調査概報』青森市埋蔵文化財調査報告書第80集 2004
- (20) 文化財保護委員会『秋田城第4次調査概報』 1962
- (21) 秋田城を語る友の会『最北の古代城柵官衙遺跡 史跡秋田城跡—発掘調査20周年記念 史跡指定から環境整備まで—』 1993
- (22) 秋田県教育委員会『東北縱貫自動車道発掘調査報告書VII』秋田県文化財調査報告書第105集 1984
- (23) 江釣子村教育委員会『本宿羽場遺跡緊急調査報告』 1972
- (24) 江釣子村教育委員会『江釣子遺跡群—昭和58年度発掘調査報告一』 1984
- (25) 北上市教育委員会『比久尼沢遺跡』北上市文化財調査報告書第36集 1984

- (26) 岩手県教育委員会『東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』岩手県文化財調査報告書第51集 1980
- (27) ㈱岩手県埋蔵文化財センター『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書（III）』岩手県埋蔵センター文化財調査報告書第44集 1982
- (28) ㈱岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集 1995
- (29) ㈱岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『本町II遺跡第二次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第410集 1995
- (30) ㈱岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『矢盛遺跡第3次・熊堂B遺跡第14次発掘調査報告書 盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第451集 2004
- (31) 金ヶ崎町中央生涯教育センター『平成4年度企画展図録 魂の家—発掘された近世の墓』1992
- (32) 山形県教育委員会『千河原遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第80集 1984
- (33) 山形県教育委員会『山谷新田遺跡 山海窯跡群発掘調査報告書 国営農地開発事業鳥海南麓地区（1）』山形県埋蔵文化財調査報告書第170集 1991
- (34) 財団法人 山形県埋蔵文化財センター『西谷地遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第12集 1994
- (35) 財団法人 山形県埋蔵文化財センター『高瀬山遺跡（2期）第2・3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第80集 2000
- (36) 財団法人 山形県埋蔵文化財センター『中袋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第97集 2002
- (37) いわき市教育委員会『愛谷遺跡—いわき好間中核工業団地造成工事に伴う調査—』いわき市埋蔵文化財調査報告書第12冊 1985
- (38) 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集 1997
- (39) 斎藤尚巳・沼山源喜治「東北地方の合口埋葬構について」『北奥古代文化』第6号 1974
- (40) 沼山源喜治「土師器合口壺棺葬について」『考古学雑誌』第66巻 第4号 1981
- (41) 東日本埋蔵文化財研究会『東日本における奈良・平安時代の墓制—墓制をめぐる諸問題—』 1995
- (42) 久世康博「社の祭祀考」「研究紀要』第2号 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1995
- (43) 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念 2002
- (44) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』 1992
- (45) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992』 1993

IV. 東田中窪前遺跡第4次調査

1. 調査に至る経緯と経過

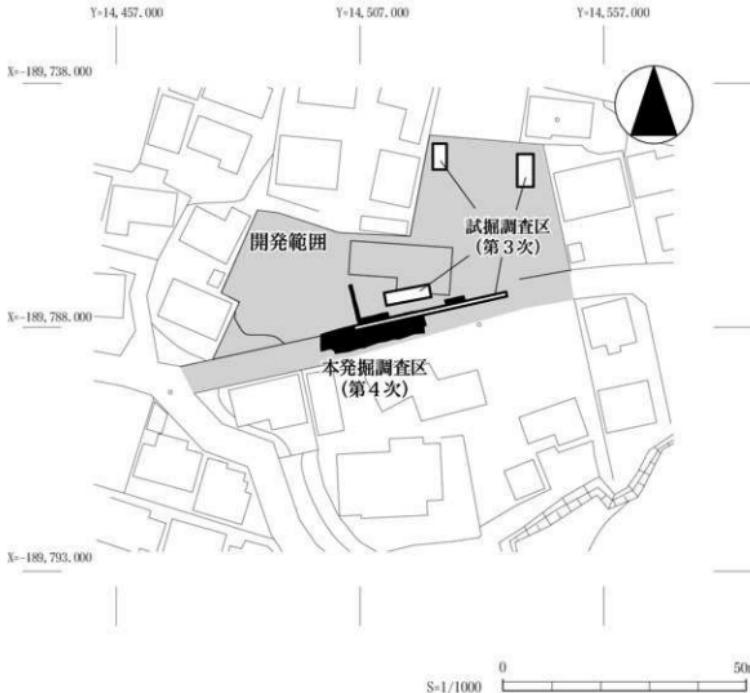
本調査は、東田中一丁目地内における宅地造成工事に伴うものである。平成17年5月13日、地権者より当該区における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての照会があった。計画では、対象地区の南に沿って幅6m、長さ約85mの東西道路を建設すること、宅地部分については盛土の厚さや地下の遺構の状況を確認してから造成方法もしくは計画そのものの見直しを検討するというものであった。このため、6月2日から遺構の分布や検出面の深さ確認する目的で、道路部分についての試掘調査を実施した（第3次調査）。この結果、計画道路の東側では後世の削平を受けていることが判明し、この周囲の宅地部分についても同様である可能性が高くなった。一方、道路中央部については、現表土下30~60cmの岩盤上で小規模な柱穴を数基確認したことから、中・近世あるいはそれ以前の遺構がこの周辺に存在するものと考えられた。この成果を以て地権者及び開発業者と協議を実施した結果、宅地部分は遺構に影響を及ぼさないような造成計画を立てること、道路部分は中央部を中心とした東西40mの範囲を調査対象とすることに決定した。7月26日、地権者及び開発関係機関と調査期間・費用の積算に関する協議を行い、当方で提示した内容で大筋の合意を得た。8月1日、地権者より発掘調査の依頼及び承諾書の提出を受け、8月4日に多賀城市を受託者とする発掘調査の委託契約書を取り交わした。

調査は8月22日より開始した（第4次調査）。試掘調査で確認した遺構検出面まで重機により表土除去を行い、23日に作業員を導入して遺構の精査及び埋土の掘り込みを開始する。その結果、本地区では古代の遺構は確認されず、小規模な柱穴が僅かに存在する程度であることが判明した。また、西側の斜面部分についても一部表土除去を行ったが、後に攪乱を受けていることが明らかであったため調査対象から除外することとした。8月24日、調査区の写真撮影と遺構の平面図・断面図の作成を行う。また、地権者の協力により、小中高等学校教員社会体験研修中の教員1名が現地発掘調査を体験した。同日午後、器材の撤収が完了し、道路部分の調査を終了した。

一方、宅地部分については、8月10日、計画道路の中央北側にある倉庫を除去する時点で、この周辺地区及び試掘を実施していないかった北東部について遺構面の深さを確認した。その結果、道路に隣接する箇所では試掘調査と同様な高さで遺構検出面を確認したが、宅地造成範囲の北東部では重機による掘削痕があることなどから、現代の削平を受けていることが判明した。また、道路北側に沿って擁壁設置工事が実施



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

されることから、9月16日、この範囲を対象に調査を実施した。その結果、年代不明の土壌を確認し、直ちに平面・断面図の作成及び写真撮影を行った。これにより、本件に関わる現地発掘調査の一切が終了した。

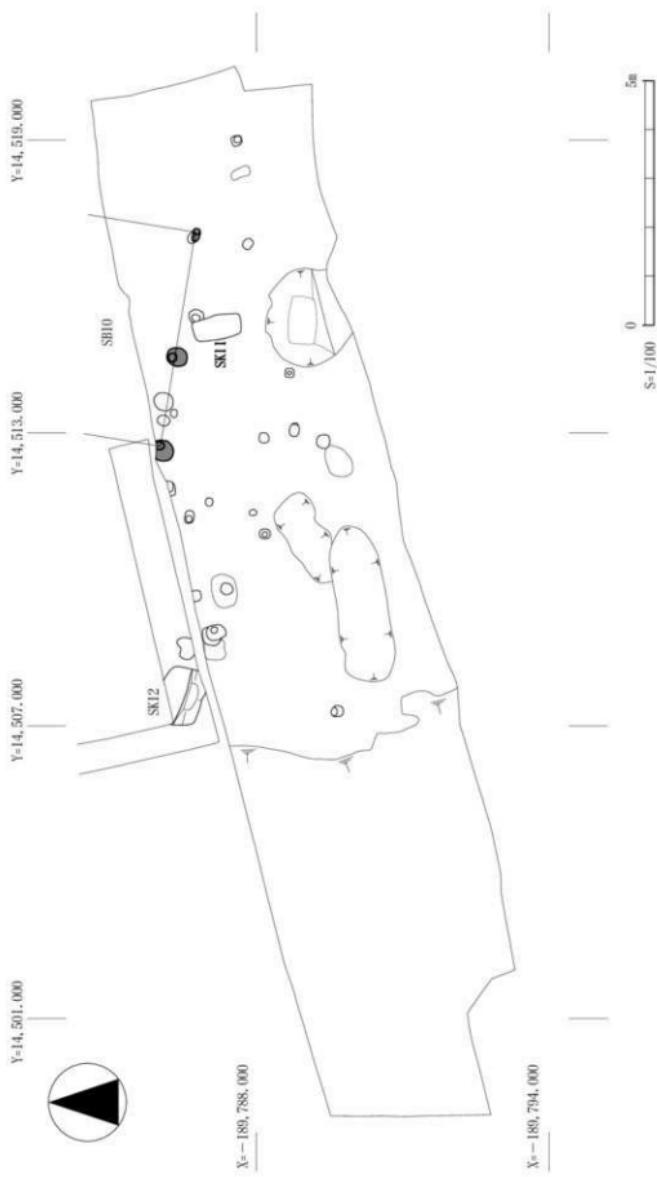
2. 調査成果

今回の調査では、現代の盛土層直下にある岩盤上で、掘立柱建物跡、土壌、その他小規模な柱穴を数基発見した。後世の攢乱が広範囲に及んでおり、発見した遺構の残存状況は悪い。

S B10掘立柱建物跡（第4回）

調査区東部で発見した掘立柱建物跡である。東西2間の柱列より推定したものであり、調査区北側にのびる南北棟の南妻と考えられる。全ての柱穴で柱痕跡を確認しており、方向は、西で9度43分北に偏している。建物の規模についてみると、梁行は5.44m、柱間は西より2.81m、2.63mである。掘り方の平面形は円形を基調とし、規模は棟通り柱穴で直径40cm、深さ30cmである。埋土は、褐灰色及び暗褐色粘土を主体とし、明黄褐色の凝灰岩がブロック状に混入している。柱痕跡は直径15～20cmであり、埋土は褐灰色粘土である。遺物は出土していない。

第3図 東田中塙前遺跡第4次調査平面図



S K11土壤（第4図）

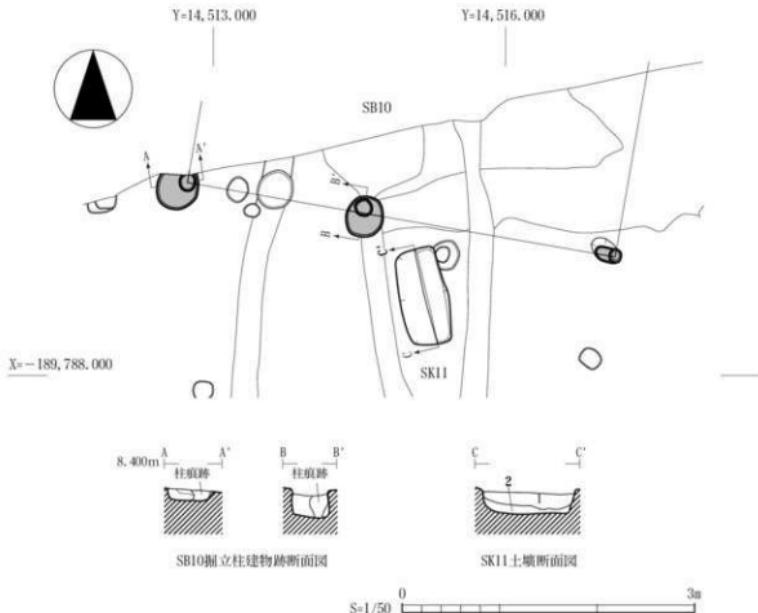
調査区東部で発見した土壤である。平面形は長方形であり、規模は長辺1m、短辺50cm、深さ25cmである。断面形は箱形を呈しており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は2層に分けることができる。上層が灰オリーブ色粘土、下層が灰色粘土であり、下層に明黄褐色の凝灰岩がブロック状に多量に混入している。遺物は出土していない。

S K12土壤（第3図）

調査区中央北側の擁壁設置区で発見した土壤である。平面形は方形であり、規模は長辺1.2m、短辺90cm、深さ50cmである。断面形は擂鉢状を呈しており、壁は直線的に外傾している。埋土はにぶい褐色粘土が主体であり、明黄褐色の凝灰岩やにぶい黄褐色粘土がブロック状に混入している。遺物は出土していない。

3.まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡や土壤を発見した。出土遺物がなく、年代を推定する手がかりは得られなかったが、柱穴の規模や形態をみると周辺地区で確認されている中・近世のものと類似している。したがって、今回発見した遺構の年代も、概ね中・近世頃であると考えておきたい。



第4図 SB10掘立柱建物跡ほか平面図・断面図

写 真 図 版



S X1646土器埋設遺構（北より）
写真図版1（高崎遺跡第50次調査）



S X1647土器埋設遺構（北より）
写真図版2（高崎遺跡第50次調査）



調査区遠景（南より）：写真奥の森が多賀城廃寺跡



S D1640遺構（南西より）



S B1638掘立柱建物跡（北より）

写真図版3（高崎遺跡第50次調査）



S X1647土器埋設遺構と S K1642土壤（西より）



S K1642土壤（西より）



S K1641土壤遺物出土状況（東より）



S K1643・1644土壤（南より）

写真図版4（高崎遺跡第50次調査）



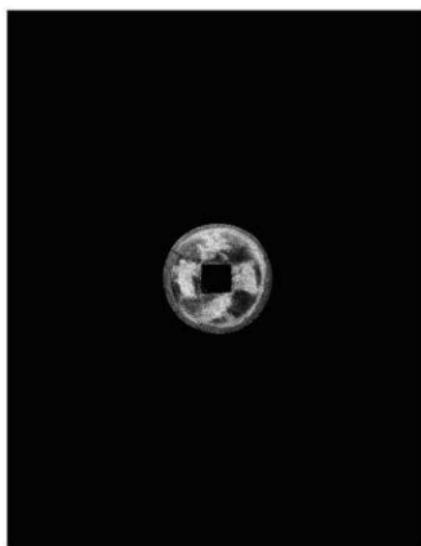
1 : 土師器甕 第7図1 R1



2 : 土師器甕 第7図2 R2



3 : 土師器杯 第6図3 R5
土師器甕 第6図2 R4・第6図1 R3 (手前から)



4 : 銭貨 (洪武通寶) R3 (X線写真)

写真図版5 (高崎遺跡第50次調査)



調査区全景（西より）



調査区全景（東より）

写真図版6（上：高崎遺跡第51次調査・下：東田中窪前遺跡第4次調査）

報告書抄録

ふりがな	たかさきいせきほか						
書名	高崎遺跡ほか						
副書名	高崎遺跡第49・51次調査 高崎遺跡第50次調査 東田中窪前遺跡第4次調査						
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第82集						
編著者名	石川俊英 武田健市 村松 稔						
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL 022-368-0134						
発行年月日	西暦2006年3月31日						

所取遺跡	所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高崎遺跡 第49・51次 調査	多賀城市 高崎二丁目 73-1、79-3	042099	18018	38度 17分 31秒	141度 59分 49秒	050516 ～ 050728	80m ²	擁壁工事
高崎遺跡 第50次調査	多賀城市 高崎2-194-1、 195、195-1、 196、197の各 一部	042099	18018	38度 17分 39秒	141度 0分 3秒	050613 ～ 050801	670m ²	アパート 建設
東田中窪前 遺跡 第4次調査	多賀城市 東田中一丁 目242-1	042099	18037	38度 17分 23秒	140度 59分 56秒	050822 ～ 050824	100m ²	宅地造成
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高崎遺跡 第49・51次 調査	集落	古代・中世・ 近世	溝・柱穴	土師器・須恵器・ 瓦				
高崎遺跡 第50次調査	集落	古代・中世 以降	掘立柱建物・柱 列・土器埋設遺 構・土壙・溝	土師器・須恵器・ 平瓦・丸瓦・刀 子・錢貨・石鐵	多賀城廃寺の伽藍南北中軸線延長線上を 調査し、2個体の土 師器甕を横位に埋設 した土器埋設遺構を 発見した。			
東田中窪前 遺跡 第4次調査	散布地 城館	古代・中世	掘立柱建物・土 壙・柱穴等					

多賀城市文化財調査報告書第82集

高崎遺跡ほか

高崎遺跡第49・51次調査

高崎遺跡 第50次調査

東田中窪前遺跡第4次調査

平成18年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市六丁の目西町2-10

電話 (022) 288-6123
